

Ⅲ章 各教科の取組

国語科

1 育成したい「思考力」

- a 論理的思考力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，既成の秩序の中で吟味する力
- b 想像力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，五感を通して得てきた知識や経験と結んで自分の考えを創造する力
- c 言語感覚：ことばの使い方の正誤，適否，美醜等について，直感的・感覚的にとらえる力

a 「論理的思考力」とは

○ ことばとそれが指し示す意味において

そのことばの整合性を吟味することである。例えば『もうどう犬の訓練』（東京書籍、『新しい国語』三下）では、「『いっしょに町を歩く練習をします。』と，1か所だけ『練習』ということばが使われているが，これは訓練ではないのか。」「練習ということばには，訓練とは違った意味があるのか。」と，ことばのもつ意味の範囲と照らし合わせながら，ことばとそれが指し示す意味の整合性について吟味する思考である。

○ ことばとことばの関係において

順序や主張と根拠の整合性等，叙述相互の整合性について吟味することである。形式論理（帰納論理，演繹論理）は，この思考に含まれる。例えば，自分の意見を述べる際，「根拠として何を挙げればよいか」「事例としてふさわしいものは何か」と，話す内容を吟味するのがこの思考である。

○ ことばとその使用者において

そのことばの使用者の意図をとらえ，その整合性について吟味することである。『森林のおくりもの』（東京書籍、『新しい国語』五下）には，木が長生きであることを述べている部分がある。その部分について，「筆者が，読み手のよく知っている例を挙げているのは，読み手の納得を得ようとしているからだ。」等，筆者の意図について吟味することがこの思考である。

第2学年「あそびを しょうかいしよう」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

話題に沿って話したり，話の内容をまとめたりする力

本単元では，まず，子どもたちそれぞれが「紹介する遊びをさらに楽しくする工夫」を考えた。そして，それを実際に遊びに取り入れるための方法を話し合った。そこで働くのが本「思考力」である。

ここでは，前の友達の発言を確認・質問したり，友達の考えについての自分の考えを話したりすることが求められる。また，話合いの内容をまとめるために，同じものや似ているものは一つにしたり，違うものはうまくできそうになぎ方を見つけたりすることが必要になる。これは，「ことばとことばの関係を吟味する力」に当たる。

b 「想像力」とは

○ ことばとそれが指し示す意味において

一語・一文を知識や経験とつなぎながら自分の読みを創造することである。『かさこじぞう』（東京書籍、『新しい国語』二下）に「じいさまは，ぬれて つめたい じぞうさまの かたやら せなやらを なでました。」という叙述がある。その一文から「じぞうさまは石でできているから，さわると，きっと氷のように冷たいよ。」「ぼくは，『じぞうさま，こんなにつめたくなってつらからうにのう。』と，じいさまがじぞうさまを思う気持ちを考えたよ。」等と，様子や気持ちを思い描くのがこの思考である。

○ ことばとことばの関係において

類似していることばや対比的なことばの関係を讀んだり、文脈とことばの関係をとらえたりしながら、自分の考えを創造することである。『注文の多い料理店』（東京書籍、『新しい国語』五下）には、「金文字→水色の戸→黄色な字→赤い字→黒い戸」のように色が象徴的に用いられている。これらを比較してその意味を生み出したり、紳士の心情の変化と重ねてとらえたりするのがこの思考である。

○ ことばとその使用者において

叙述を根拠に書き手・話し手の意図等をつかみ、自分の考えをつくり上げていくことである。物語の主題をとらえたり、説明文における筆者の主張を讀み取った上で、自分の経験とかかわらせたり、関連する本や文章から得た知識と結んだりしながら、自分の考えをつくり上げていく際に働くのがこの思考である。

第5学年「新聞記事が伝えること」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

見出しや写真、本文を手がかりに、新聞記事の書き手のメッセージをとらえる力

新聞記事に採用される写真は、毎日7000枚ほど新聞社に送られてくるものの中から選ばれたものである。見出しはその記事の中心を短い言葉で表したものである。本文は、その記事を詳細に表し、出来事の全体像を伝える。このように「見出し」「写真」「本文」とともに書き手のメッセージが込められている。

本実践では、新聞記事を読み、「見出し」「写真」「本文」の三つに共通のメッセージを見つける。そうすることで、記事の根底に流れる書き手のメッセージを一層強くとらえられるようになるのである。ここで働くのが「ことばとその使用者について自分の考えを創造する力」である。

c 「言語感覚」とは

○ 正誤

語の使い方や文の組み立て方について、言語規範に合っているか否かを直感的に判断・評価する能力。

○ 適否

物事を適切に言い表しているか、場や相手にふさわしい表現か等、表現の妥当性や効果を直感的に判断・評価する能力。

○ 美醜等

美しい・汚い、明るい・暗い、固い・柔らかい、重い・軽い等、あるいは軽快、重厚、優美、勇壮等、表現の微妙なニュアンスを直感的に判断・評価したり感覚的に味わったりする能力。

第6学年「子ども句会を開こう」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

俳句作りにおいて、ことばを別の表現に変えたり、ことばの順序を入れ替えたりすることによって生じるニュアンスの違いを直感的に感じ取る力

俳句では、17音の中に作者の思いが込められている。その短さ故に、一つのことばがもつ役割は大きい。また、ことばの順序も句のイメージを形成する上で重要となる。本単元では、そのような俳句の性格を生かし、俳句中のことばを類似することばに入れ替えたり、順序を入れ替えたりすることで生じるニュアンスの違いを感じ取っていく。

例えば、「手紙書くいっしょにとどけ虫の声」と「手紙書くいっしょに入れたい虫の声」とを比較して両者の語感の違いを感じ取ったり、「百びきが同じ向き飛ぶ赤とんぼ」と「赤とんぼ飛ぶ百びきが同じ向き」のようにことばの順序による句のイメージの違いを感じ取ったりする力が、「美醜等をとらえる言語感覚」である。

（ここで取り上げた俳句は、『東京書籍、『新しい国語』六下、23頁』より引用）